

高山の文化を高めた人々

76

飛驒における茶・華道を盛り立てた人 住 俊

住 齊

場が結納となった。父は結婚相手がどんな人か分からず不安だったが、「美人なので良かった」と一代記で述懐している。

父は新宿区百人町にあった陸軍技術研究所の技手だったので、昭和十四年四月に高山の家で行われた結婚式を終え東京の借家に同道することが新婚旅行だった。昭和十六年、老祖父母の切望により父は十二月末に退職した。十二月八日の日米開戦前に願い出ていたため退職でき、まずは東京市防衛局技手に転じた。昭和十七年四月十八日に米軍B25爆撃機により東京が突如空爆された。空母より発進し、各地を空爆し中国大陸に去ったが、軍は殆ど応戦できなかった。驚いた父は防衛局を辞し、七月に帰郷した。二人の子供と祖父母一緒の生活が始まった。八月に父は斐太中学校の化学の教諭となった。



表千家斐太好友会総会にて
(平成12年4月、83歳)

父は昭和二十二年に高山高等女学校を辞し、下三之町の自宅の松風庵で茶・華道教授に専念した。教授料の殆どは道具購入や茶・華会開催費の形で弟子に還元され、家計には食費を出すだけだった。子供は四人になっており、次々と保育園・小学校に上がり養育費が高んだ。そこで母は昭和二十五年に教職に復帰し、丹生川中学校教諭となった。父は大八中学校教諭となっていた。昭和三十三年から子供達が次々と大学に進むようになったので、受験は一期限りで国・公立大に限る

という条件が課せられた。息子二人娘二人とも四年制大学に進み、飛驒外で下宿する者が三人の時が二年間、二人の時が六年間あった。両親の稼ぎでは学費を賄え切れず、事態を予期して蓄えていた貯金を取り崩しこの時期を乗り切った。



母(45歳)と亡くなる4カ月前の祖父
(昭和37年4月)

昭和四十七年三月に父が清見中学校長を最後に定年退職した。これを潮に母は高山南小学校教諭を五十五歳で辞し、茶・華道教授に専念した。以前から祖父の下で茶・華道を学んでおり(茶名宗俊、華名柳枝)、茶道では表千家より昭和三十四年六月に地方講師、昭和四十九年一月に教授に任じられた。華道では昭和五十二年九月に池坊華督、昭和六十年九月に副総華督、平成七年一月に最高位の総華督に登り詰めた。祖父は昭和三十七年九月に亡くなったが、祖父から受けた茶・華道薫陶を偲んで、母を含む先生級の人たちが翠柳会、より広い人たちが柳村会を結成した。いづれも祖父の雅号「翠雨軒柳村」にちなんでいる。また祖父が結成した松風社にちなんで、昭和四十八年一月に松風会が母を中心として結成され

た。母の持ち前の包容力と親分肌により会員は最高五十二人に達した。会は平成十六年における母の米寿まで続いた。飛驒全体に対しては、茶道では表千家同門会岐阜県支部の下に昭和五十三年に斐太好友会が母も参加して結成され、昭和五十四年まで庶務を務めた。昭和五十七、五十八年に副会長、昭和五十九、六十年に会長になった。また、住の家は表千家家長生庵堀之内宗匠と関係が深く、曾祖父(作助)も祖父も直弟子だった。この縁より母は「こまの会」を結成し、堀之内宗完・宗心宗匠をほぼ二年置きに数回以上招き飛驒びとに向け講習会を催した。「こま」は長生庵の記しである。華道では、池坊華道会斐太支部が昭和十六年に祖父により立ち上げられていたが、母は昭和四十八、六十三年の十五年間に渡って会長を務めた。昭和六十二年六月に中部三県連合花展を初めて高山で開催し、大会長を務め、池坊家元四十五世専永宗匠を招いた。出瓶数は七百六十八に達した。また、高山中日文化センター講師を数年間務め、飛驒における華道敷衍に尽力し、富山からも参加者があった。

昭和六十年に高山市文化協会文化功労者顕彰、平成九年に岐阜県文化・芸術功労者表彰を受け、平成十八年一月一日に享年九十歳で生涯を閉じた。家族のみならず飛驒びと全ての向上に捧げた生涯だった。